

よくわかる皮膚科学

化粧品・医薬部外品の変遷

化粧品には、「化粧品タイプ」と「医薬部外品タイプ」の二つがあり、特に「医薬部外品」というのは日本独特の名称です。今回は、皮膚科学とは直接の関係はないですが、どのようにして二タイプになったのかその歴史を振り返ってみます。

日本において医薬品等について衛生的な規制が行われるようになったのは明治以降です。明治維新後医療に西洋医学が用いられるようになり、和漢薬に代わって洋薬になったので、これらの医療用医薬品を規制する法律が、明治二十二年に公布された「薬品営業並薬品取扱規則」というものです。一方、一般用医薬品（当時は「大衆薬または「売薬」と呼ばれていた」）については別の法規制の下に置かれていて明治三年に「売薬取締規則」が定められ、明治十年には「売薬規則」が公布されました。さらに明治十九年に「売薬検査心得」が発令され、この中で滋養強壯剤・清涼飲料水・化粧品・歯磨粉は何れも疾病の治療を目的としないので対象外とすることが明記されました。しかし、その後保健衛生上の観点から何らかの規制は必要として、明治三十三年「売薬規則外製剤取締規則」が各府県令により発布されました。しかしこの規則は必ずしも全国一律ではありませんでした。そして大正五年に東京府で「売薬部外品営業取締規則」という警視庁令が設けられました。ここで対象とされた製品は現在の医薬部外品と似たようなものでした。国は、昭和七年にこれを全国規模において規制する必要を認め、「売薬部外品取締規則」を制定公布しました。



この規則により「売薬部外品」（現在の医薬部外品の基）の概念が全国的に統一されることになりました。その規制の要点は①売薬部外品を発売する者は地方長官の免許を受けること②その容器又は被包に発売者の氏名住所及び「売薬部外品」の文字を明記することの二点でした。戦時中の昭和十八年に「薬品営業並薬品取扱規則」と「売薬法」、そして大正十五年に制定された「薬剤師法」の三法を統合する「薬事法」が制定され、この法律でそれまで別の規制を受けていた医療用医薬品と一般用医薬品が、医薬品としての一元的な規制を受けることとなり、これに伴って「売薬部外品」は「医薬部外品」と呼称が変わることとなりましたが、薬事法の対象製品ではなく、依然として薬事法の規制対象外でした。終戦後、戦前の諸制度の民主化が図られる中で、薬事制度にも見直しを行う必要性から、昭和二十三年に旧薬事法が制定されました。この法律において、医薬品以外に化粧品と医療用具が法律の対象に加えられた反面、医薬部外品という制度は廃止され、従来の医薬部外品は医薬品又は化粧品として規制を受けることになりました。その後社会情勢の急激な変化もあつて実情に合わない点も大きくなってきたため、昭和三十五年に現行薬事法が制定されました。この法律で、医薬部外品制度が復活し、その製造については医薬品と同様の規制を行うが、販売については化粧品と同様に自由にするということとなり、現在に至っている次第です。



東洋医学による健康法

夏のうつ病対策の巻

中医師 黄 懐龍



うつ病は「心の風邪」ともいわれ、ストレスの多い現代では誰でもかかる可能性のある病気です。有病率は人口の約三〜五%といわれています。しかも本人は気づかず何年も「うつ状態」で過ごしてしまう場合も多く、まだまだ一般人にはよくわからないことが多く、治療が遅れば自殺に繋がるなど悪化する恐れがあります。

誰でも失敗や失恋をする心が落ち込みます。健康な人であれば、二〜三日もすると元気になるはずですが、しかし、うつ病の人は通常二週間以上憂うつな状態が続いて、どうにもやる気が出ない状態になり、「自分はダメな人間だ」「生きていく価値はない」「いっそいなくなつた方が楽になれる」などと考えるようになったり、仕事の能力が極端に落ちたり、物事を決められなくなつたり実行できなくなつたりして、日常生活に支障が出てきます。この状態を「うつ状態」といいます。

うつ病は、生真面目で几帳面な人がなりやすいといわれています。このような性格の人が周囲に気を使いすぎたり、過剰なストレスを受けたり、心配事や過労などが重なる発症します。うつ病症状は、精神症状と身体症状の二種類があり、精神症状として多いのは、抑うつ気分、興味の喪失、意欲の低下の三つで、身体症状として多いのは、不眠症や、疲れやすさ、食欲不振などがあります。「抑うつ気分」とは、気分の落ち込みや、何をしても晴れない嫌な気分や、孤独感、悲しさなどによって、集中力が低下する、判断力が鈍る、自信が喪失、感情が麻痺した状態です。これら症状が現れる特徴として日内変動（朝方調子が悪く、夕方には元気がでてくる）と季節変動（春と秋に悪くなるケースが多い）が知られており、大体一年

うつ病の治療は、抗うつ薬物主体で、精神療法（カウンセリング）を組み合わせた治療が行われます。うつ病は投薬治療を受ければ、多数の人が二〜三週間で回復に向かうという事は案外知られていません。早期発見・早期治療が原則で、恐がらずに専門医に相談することが大切で、家族の理解協力も必須です。うつ病は心身の疲労状態ですので、休養をとることも大切です。オーバーペースにならないように、規則正しい生活を送り、一人で考え込まず誰かに相談し、気分転換をしてストレスを解消することが大事です。又運動・スポーツ等で頭をリラックスさせます。

中医学では、うつ病を鬱証といいます。主に肝気鬱結、心神不安によるものと考えられています。治療では疎肝理気、養心安神の方法をとります。ここでうつ病によく使われる指圧マッサージ療法を紹介いたします。以下のツボを指で押ししたり揉んだりすると、不眠や憂鬱気分などの症状を軽くします。さらに、抗うつ薬物治療の上にも実施すれば、より効果を高めることが期待できます。

★ツボを探す時に用いる一寸とは、親指の関節部横幅の長さです。三寸は、親指を除く4本指の幅です。

- 百会：頭のてっぺんで左右の耳上端を結んだ線上。
- 神門：手のひら内側で、手首の一番小指側の際。
- 安眠：耳たぶ後ろの窪みと、後頭部髪の生え際の左右の窪みの連結線の midpoint。
- 内関：腕の手のひら側で、手首関節の真ん中から上に2寸の所。

